



考古資料からみた朝鮮諸国と倭

The Interaction between the Ancient States in Korea and Wa Viewed from the Archaeological Materials

吉井秀夫

はじめに

- ① 竪穴式石槨の展開と外来系考古資料
- ② 横穴式石室の展開と外来系考古資料

おわりに



[論文要旨]

本稿では、加耶地域が、倭や朝鮮半島の周辺諸地域とどのような交渉関係を結んだかを明らかにするための一つの試みとして、竪穴式石槨と横穴式石室が主たる埋葬施設として用いられた段階の加耶地域の墓制における、外来系考古資料の様相について検討をおこなった。まず竪穴式石槨が埋葬施設として用いられた段階では、加耶地域内やその隣接地域から土器の搬入がみられる他、倭・百濟・新羅系の考古資料が存在する。ただし、それらが墓制全体に占める割合は限られている。また、池山洞古墳群と玉田古墳群では、影響を受けた地域と、墓制に対する影響の大きさに違いが見出された。次に、横穴式石室が主たる埋葬施設として採用される段階では、埋葬施設の構造が変化しただけではなく、葬送観念にも大きな変化が認められる。また副葬品において外来系考古資料が占める割合も増加する。こうした変化については、百濟からの影響が指摘されてきたが、新羅・倭からの影響も少なからず見出される。中でも倭系考古資料が目立つ墳墓については、榮山江流域の前方後円形墳の様相との対比から、被葬者を大加耶支配下の倭系集団とみる説が提出されている。しかし、それ以前から古墳が築造されてきた古墳群や日本列島でも、同様の変化がみられることを念頭において、墓制の変化の類型化とそれに対する解釈がおこなわれる必要があると考えられる。